

精神保健福祉援助実習における 教育的効果の一考察 (I)

長坂和則 川村宣輝

A Study of Educational Effect in the Psychiatric Social Work Practicum (I)

Kazunori Nagasaka, Nobuki Kawamura

Abstract

Students grew while they receive various effects during their practical training in the field. In this paper, the educational effect in the field practical training was verified through interviewing students who had recently completed their training. In this investigation, it was confirmed that the feedback from the practical training leaders was important in order to make the practical training experience effective.

Key Words: field practical training, feedback, practical training experience

1 はじめに

本学設立3年目にあたるこの8月から、福祉心理学科では初めて現場実習に学生を送り出すこととなった。実習前の学生達の不安と期待の入り交じった表情、実習終了後の満足感と一回り大きく成長し自信に満ちた表情の学生達の様子から、学内の授業だけでは達成できない現場のもつ力の大きさを改めて感じている。

精神保健福祉士が国家資格となり、これまで7回の国家試験が実施され、現在26542名が合格している。しかし、先に資格化された介護福祉士および社会福祉士と比較すると、精神保健福祉士の国家資格化は10年の差がある。この差は単なる法制度上の差だけにとどまらず、実習教育に関する分野の研究においても大きな差があることを指摘せざるを得ないのである。

近年、精神保健福祉士を養成する大学や専門学校も急増し、精神保健福祉援助実習（以下、現場実習）において、実習生を受入れる精神保健福祉士養成に関する指定施設である精神科病院、精神科診療所（クリニック）、精神障害者社会復帰施設等の施設数にも限界があり、需要と供給のバランスがとれていないのが現状である。本学の場合も、学生が通える山梨県内の受入れ指定施設等の数は限られており、県外の病院・施設等にまで範囲を広げて検討せざるを得ないことから、実習生の送り出しに関しては非常に厳しい状況となっている。こうした実習先確保の困難さに加え、現場実習を効果的にするための指導方法や現場実習に連動した事前教育、事後教育の在り方など数多くの課題を抱えながら現場実習を行っている。

また、実習を受入れる施設サイドにおける課題としては、通常業務との兼ね合いから受入れる実習生の人数・時期の調整や、期間中の実習プログラムの設定、実習生の具体的な指導方法をどうすべきかなどが挙げられている。

このように現場実習については、教育体制・指導方法もまだ十分に確立されているとは言い難いことから、送り出す大学側とそれを受入れる実習施設の双方において、多くの検討すべき課題が山積していることを指摘しなければならない。

現場実習を終えた多くの学生達の変化が顕著となることに着目し、専門職への不安などを抱えながらも、学校の授業や資格取得に対するモチベーションが高まっていることは、学生の成長に多大な教育的効果を及ぼしているものと考えられる。つまり、実習体験に基づく学生の変化と、実習教育を通じて学生に影響を与えている要因を明確にする必要があると考えたのである。

すでに、精神保健福祉業務の実践現場からのニーズは、単に国家資格取得者ということから専門職としての「質」を問うものへと移行しているのである。この資格を一定の基準として、専門職の資質の向上が求められてきている。そうしたことから専門職の養成における教育については、上記の多くの課題を抱えていると考えられるのである。

本稿では、本学の実習教育の充実を目的とした事前教育、事後教育等の実習関連カリキュラムを概観し、現場実習を経験した学生に対するインタビューの分析を通して、現

場実習の教育的効果を検証するとともに、実習体験を生かした実習教育の課題とソーシャルワーク教育の方向性について考察するものである。

2 本学の現場実習の位置づけと課題

(1) 本学のカリキュラム構成

まず、本学における精神保健福祉士養成の教育カリキュラムとその特色について概観してみる。

本学の福祉心理学科は、入学時から社会福祉士コースもしくは精神保健福祉士コースを選択するようになっている。その中で、選択により両資格の受験資格を取得できていることが、本学の大きな特色となっている。

1・2年次において、「総合基礎科目」及び「専門基礎科目」を履修し、そして2年次から3年次にかけて国家試験指定科目である、精神保健福祉論、精神科リハビリテーション学等の「専門科目」を履修する。国家資格取得関連科目に偏りがちな養成校のカリキュラムを超えた、「豊かな人間力」の育成を目指した幅広い分野の知識と教養を、4年間かけてじっくりと修得できる科目選択が可能となっていることも、本学の特色の一つである。

そして、3年次後期から4年の前期にかけて、社会福祉士コース又は精神保健福祉士コース、もしくは両コースを選択した学生の国家資格取得にかかわる現場実習が実施される。本学の方針として、学生にできるだけ多様な経験をしてもらうため、基本的には2ヵ所の異なった機関や施設（医療機関、行政機関、精神障害者社会復帰施設）において現場実習を行うこととしている。1ヵ所につき約2週間（90時間）実施し、計180時間の現場実習を行うものである。これらは厚生労働省の規定（学内実習90時間および現場実習180時間の270時間）によるものであり、国家試験受験資格取得の条件となっている。

(2) 現場実習に向けての事前教育の取り組み

①学外実習

現場実習に向けた事前教育の一環として、1年次から福祉現場の見学実習を計画的に取り入れている。1年次および2年次において実施されている見学実習では、学生が見学実習で得た精神科病院や精神障害者社会復帰施設等の具体的なイメージを活用しながら、実習指導をしていくものである。

現場実習に関するカリキュラムの位置づけとして、具体的には1年次においては施設見学を中心に、山梨県内の精神障害者社会復帰施設（医療機関も含む）を始めとして、児童福祉関連施設、身体・知的障害児者施設、高齢者関連施設等を幅広く見学することによって、社会福祉への関心とその視野を広げさせるとともに、福祉関連施設の現状を理解することを目的としている。また同時に、地域の特性や社会資源を理解

することも視野に入れている。

2年次においては、1年次での全般的な見学実習を基礎に、単なる施設見学にとどまらず3日間を現場で実習体験することを重視した、参加型の体験観察実習を行うこととしている。この実習においては可能な限り利用者とかかわり、現場の状況や利用者を観察するとともに、サリバン (H.S.Sullivan) の「参与観察 (participant observation)」をその意図に含め、クライアントにかかわる自分自身をも観察することの体験をねらいとしている。併せて、そこで働く専門職としての意義を理解させることもその主な目的としている。こうした学内の講義だけでは得られない実習体験が、現場実習の基礎となっている。

②外部講師の招聘

また、事前学習では、3年次前期の実習直前の時期を中心に、福祉現場の第一線で活躍する外部講師を招いての講義を積極的に取り入れている。その外部講師招聘の意図には2つのねらいがある。一つには、それぞれの現場で働く精神保健福祉士の方々に、福祉現場の実際や精神保健福祉士としての職業について等、現場からの生の声を、実習を間近に控えた学生に対して発信してもらっている。日常業務の中で、クライアントが抱える問題点やクライアントとかかわることの意味、他のスタッフとの関係や連携の大切さ等、自己の体験を交えながらの説得力のある講義を通して、現場におけるソーシャルワークの具体的な展開を理解してもらうことを目的としている。これにより学生達は、実際の福祉現場の状況を理解し、実習での達成課題や事前学習に必要な事項を確認しながら、現場実習への動機づけを高めていくこととなる。

二つ目には、外部講師はできるだけ現場実習と関連する機関・施設から招聘することとしている。その意図としては、地域の現場とのかかわりを大切にしたネットワークの構築と、地域との連携を視野に入れたものである。外部講師による講義は、学生にとって専門職としてのソーシャルワーク実践の具体的なイメージを高めることになる。実際に実習を受け入れている機関・施設の専門家であることで、学生の興味いわゆる外発的なモチベーションを高めると同時に、学生の様々な思いをより具体的なイメージ化するのに役立っている。また、こうした外部講師から実習に関する心構えなど指摘される事柄が、現場実習に臨む姿勢や意識までもも焦点化しているものと思われる。

(3) 実習期間中の教育

実習期間中期に、教員が実習先を訪問し学生を指導する実習巡回指導を実施することとしている。これは、実習中において実習施設等の実習指導者との連絡調整をしながら、学生の実習中の取り組みや実習の進捗状況について指導を行うものである。実習の早期における実習生の状態は、緊張を中心とする不安や迷いに直面し、自分の行動への疑問と自信喪失等を抱えている場合が多い。また、実習環境に慣れることに精一杯な状況で

あるため、ソーシャルワーク的な援助の視点までには至らないのが現状である。

実習巡回指導のポイントとなるものに、実習生が抱える問題の把握、実習課題の確認と修正、実習への取り組みの態度や意欲の確認などがある。実習指導教員は実習先の訪問指導において、不安や緊張の除去、実習のつまずき、疑問や問題点の解決、実習指導者との関係等について、実習指導者や実習生と具体的に話し合い、後半に向けての実習への取り組み方法が確認されるのである。ここでの実習指導教員の役割として、実習体験が学生のその後の成長に結びつくよう指導し、さらに、実習現場において実習指導者と実習生の意思疎通がスムーズにとれるような働きかけを双方に行うことが必要となる。

(4) 現場実習を終えての事後教育

実習終了後、実習指導教員は学生と個別面接を通し、実習の振り返りの作業を行うこととしている。実習体験において、学生が噴出させてくるポジティブな感情やネガティブな感情等を受け止め、「学べた点」「学べなかった点」などを整理し、実習体験のフィードバックを行うのである。学生の疑問点を受け止めながら、現場実習において、実習指導者との関係やクライアントとの関係について、学生自身はどのような体験をして何を学べたのか等を明確にしていく。さらに、実践の場で行われている現状をふまえ、精神保健福祉士としての援助の視点と職業に結びつくモチベーションに焦点化し、学生へのフィードバックを行っていくのである。

また、学生によっては現場実習を通して、クライアントや他のスタッフの行動や言動から、実習生自身が抱える自分の問題に直面することがある。自分の問題や家族の問題を直視せざるを得なくなるつらさと、あえてその問題を直視せずにやり過ごしてしまう場合がある。学生自身やその家族の問題について、実習体験によってこれまでの学生の体験が揺さぶられてしまうことも含め、実習指導および事後教育において十分配慮されなければならない。

5 事例からみる実習体験（実習生のインタビューから）

(1) インタビューの目的及び対象等

今般、現場実習を終了した学生を対象に、実習体験の聞き取り調査を実施し、調査結果を分析することにより、一連の実習教育における現場実習の効果について考察するものである。

インタビューの対象者は、平成17年8月から10月までの3ヵ月間に、第一回目の現場実習を終えた本学福祉心理学科精神保健福祉士コース3年生の学生13名を対象とした。実習先の種類別では、精神科病院7名、保健所等4名、社会復帰施設（授産施設）2名となっている。また、実習期間については全員12日間（90時間）となっている。

インタビューの項目は、現場実習における実習体験の内容を次の4つに分類した。

①実習指導者との関わり、②施設等の利用者との関わり、③実習指導教員から見た学生

事例No. (性・学年)	実習先 種 別	期間	実習指導者の関わり	利用者との関わり	事前学習	教員からみた学生の変化	学生の自己評価 〔A(高)～D(低)〕	実習プログラム
事例1 女性 3年	精神科 病院	12days	指導者は大変忙しいため、質問はまとめて日誌に書き、翌日のまとめの時間に回答してもらう。 自分も指導者のようなPSWになりたいと思うなど、具体的なイメージができたようである。	これまで精神障害者と接触はなかったので、利用者とのコミュニケーションの方法が最初はわからなかった。 名前を覚えてもらったり、作業の作品をもらったり、少しは利用者を受け入れてもらったと思う。	入院形態 守秘義務 32条、生保、 社会適応訓練 福祉手帳	実習終了当初は学習不足を実感し、意欲も高かったが、日が経つにつれやる気も薄らいできたようである。 実習後のコミュニケーションをいかに持続させ、今後の学習に活かしていけるかが課題となる。	B 開始当初は、過度の緊張のため眠れなかったり、指導者への質問も充分でできなかった。 単独での実習で、頼る仲間がいなかったのが自分にとってよかつたと思う。	・相談室 ・病棟 ・day care ・グループホーム
事例2 男性 3年	精神科 病院	12days	指導者が多忙で、学生が3人同時の実習だったこともあり、自分で判断し、考えさせる指導であった。 他の実習生が4年生で、学習面で比較されることを意識するあまり、質問ができないう状態であった。	親が精神科病院勤務であり、その関係で中学校くらいから精神障害者との接触があった。そうしたこともあり、特に緊張感はなかったが、患者との接し方をもっと学びたいと思った。	医療費 32条 福祉手帳	PSWとしての基本的な勉強の他、生理学等関連する領域の専門知識を身につける必要性を感じた実習であった。 また、自分なりの具体的なPSW像や、就職先のイメージが作れた実習となった。	C 勉強不足を痛感する。利用者に対してどこまで踏み込んだらいいかわからなかった。 病院の他にもいろいろな施設等を体験できたのはよかつた。	・相談室 ・病棟 ・授産施設 ・グループホーム ・保健所
事例3 女性 3年	行政機関	12days	自分も今回の指導者のようなPSWになりたいと思うなど、将来の具体的なイメージができた。	実習前までは怖いイメージがあったが、デイケアでメンバーの方から声を掛けられるなど、むしろ親しみやすいことがわかつた。 利用者との正面から向き合い、気持ちを伝えることで受け入れてもらえることがわかつた。	保健所業務 守秘義務 福祉手帳 32条	学習態度が以前に比べ積極的になり、授業中の発言も増えてきた。 自分がどんなPSWを目標としたいかが具体的に became したことにより、意欲が向上してきたようである。	B～C 自分なりに意欲的に取り組めた。 精神保健に関連する社会の動きにも関心が向くようになり、新聞は欠かさず目を通すようになる。	・保健所業務全般 ・精神保健相談 ・day care ・授産施設 ・訪問相談 ・関係機関連絡会議
事例4 男性 3年	行政機関	12days	指導者のPSWとしての動きを見て、仕事の厳しさ、大変さがわかつた。 利用者との話し方や気のつかいやすさ等のコミュニケーションが勉強になった。 多忙な中、質問の時間を割いてもらった。	当初は利用者話しにくいと思っていたが、きちんとコミュニケーションをとることにより、交流ができることがわかつた。	保健所業務	具体的なPSW像や、その厳しさについて自分なりに実感できた実習だったようであるが、それが実習後の授業態度や学習姿勢に反映されているとは感じられない。	C 利用者との交流はできたと思うが、知識が乏しく、勉強不足を痛感する。 現場は大学の教科書とは全く違うことを改めて認識する。	・保健所業務全般 ・精神保健相談 ・day care ・授産施設 ・訪問相談 ・関係機関連絡
事例5 男性 3年	行政機関	12days	保健所の指導者を中心に、実習プログラムの関係施設等の担当者から指導を受ける。全体の調整、日々のまとめは指導者が的確に行うことにより、全体にまとまりのある実習となった。	日替わりで接する利用者が変わったため、特定の利用者とのコミュニケーションの深化はなかったが、本人の温厚なキャラクターから自然に受け入れられた。	社会復帰施設 守秘義務 福祉手帳 32条 生保、年金	今後取り組むべき課題が明確になり、自分なりの多くのテーマや問題意識が生まれた。 元々こつこつ取り組むタイプであったが、具体的な目標ができ、資格取得や就職に対するモチベーションがさらに高まったように思う。	B 利用者との会話の中で基本的な質問に答えることができず、勉強不足を感じた。 また、相談場面でも利用者のニーズを充分に聞けなかったため、力量を高めていく必要性を実感した。	・保健所業務 ・精神保健相談 ・地域作業所 ・day care ・精神保健会議 ・断酒会
事例6 女性 3年	精神科 病院	12days	実習指導者が忙しく話しかけにくい状況。 夕方には必ず振り返りの時間をとってくれその日の疑問が解決できている。実習指導者から常に「自分はどうか感じたのか」を問われる場面が多かつた。	医療相談室に入室するクライアントへの対応。デイケア場面でプログラムを一纏に過ごす。(積極的なかわりはない)	精神保健福祉士法 入院形態 32条 福祉手帳 生活保護 障害年金	クライアントとの積極的なかわりがないことから実習指導者から学ぶことが多かつたようである。 そのためモデリング(模倣)が特徴として見られた。実習指導者がクライアントにかわる姿や姿勢を同じように模倣している。	B 実習は慣れるまでに時間がかかった。 緊張が強くなくて、実習の中間まではガチガチになっていたと思う。 実習が終わってから授業とつながったところが多かつた。	・医療相談室 ・day care ・各病棟 ・地域の作業所
事例7 女性 3年	精神科 病院	12days	二人のワーカーがそれぞれの場面でかかわってくれた。夕方には必ず反省会があり、実習のことなど話してくれた。実習日誌を良く読んでくれ、日誌および口頭でのフィードバックがあった。	時間のある時は病棟実習が組まれ、多くの患者さんと話が出来た。コミュニケーションの取り方の難しさやかわかり方を考えさせられた。自分がクライアントと話すことで症状が不安定になるのではないかと考えた。	入院形態のみ	精神科病院で働く精神保健福祉士の姿を見て、同時に実習を体験してこの仕事してみたいと思えた体験している。 精神科病院のイメージが大きく変化し、収容施設のような理解から治療や援助の意図に気づいている。 クライアントへ耳を傾けて聴く姿勢を意識してかかわるようになってきている。	D 実習はとても満足。 実習が二人だったのでお互いに話し合い解決することが多かつた。	・相談室業務 ・各病棟 ・day care見学 ・グループホーム見学 ・作業所での作業 ・訪問看護指導

精神保健福祉援助実習における教育的効果の一考察 (I)

事例No. (性・学年)	実習先 種 別	期間	実習指導者の関わり	利用者との関わり	事前学習	教員からみた学生の変化	学生の自己評価 〔A(高)→D(低)〕	実習プログラム
事例8 女性 3年	精神科 病院	12days	二人のワーカーがそれぞれの場面でかわってくれた。夕方には必ず反省会があり、実習のことや知っていたほうが良いことなど話してくれた。実習日誌を良く読んでくれ、日誌および口頭でのフィードバックがあった。実習中に直面した課題に対して指導者から指示を受け自己学習。目の前で必要とする制度を調べ理解を深めた。	病棟でクライアントとのかわりからワーカーの存在の大きさを知った。クライアントと話すことで病気について思っていたことや誤解にも気づくことが出来た。	実習先をインターネットで調べた程度	ワーカー業務の忙しさを見て自分達にこの仕事が出来のかを問うものとなっている。クライアントとのコミュニケーションを取るなかで、クライアントに受け入れられた体験をしている。その後実習へのモチベーションが高まっている。信頼関係と人に依存することの違いを自分に問うようになっている。	D 実習はとても良かった。しかし、勉強不足を痛感する。	・相談室業務 ・各病棟 ・day care見学 ・グループホーム見学 ・作業所での作業 ・訪問看護指導の同行
事例9 男性 3年	精神科 病院	24days	精神科デイケアが中心で、デイケアスタッフとの関係が濃くなっている。医療相談室では二人のワーカーが電話対応や来室した患者さんの面接の姿を観察していた。忙しいワーカーにあまり質問など出来なかった。	精神科デイケアにおいてクライアント共に過ごす時間が多く、プログラムを一緒にいきコミュニケーションは十分に取れた。実習指導者から受け持ち患者を担当してもらい時間がある限りかわっている。	入院形態 精神保健福祉法を読んだ程度	24日間の実習でデイケアに入っていることが多く、クライアントから受容される体験をしている。事前の学習不足を感じているが、それぞれの場面でその場しのぎの様子も伺える。	D 楽しかった。勉強してもう一度実習してみたい。	・精神科デイケアが中心 ・医療相談室 ・保健所と作業所見学
事例10 男性 3年	行政機関	12days	実習指導者は忙しい状態だけ短いフィードバックがあった。自己学習のみの日があり不安になった。実習日誌で指導者からのフィードバックにより、自分の課題や次の課題のヒントを得ている。	クライアントから声をかけられたことから、自分の存在を意識してくれ、ふれあいの大切さを知った。(名前を覚えてくれていた)	保健所業務など 社会資源の状況が勉強不足で知っているだけではダメと感じた。	クライアントの立場になって考えようとする視点が成長している。緊張感を持ってクライアントに接することの大切さを理解している。(クライアントの尊重) 人の話を聴く場合にその訴えの背景(家族やその生活)を考えながら聴くことを理解している。	B 実習現場(作業)に慣れるために時間がかかった。	・断酒会例会 ・精神保健相談 ・day care ・援護寮 ・地域生活支援センター ・共同作業所の見学
事例11 男性 3年	授産施設	12days	実習の始めは実習指導者とのコミュニケーションが取りにくかった。(作業の現場に放り出された感じ)クライアント共に行う作業に慣れることが優先。実習日誌で話を聴くことの意味や記録の仕方などの細部にわたりフィードバック。	作業を通じてクライアントから受け入れられた体験。作業に早く慣れることが優先されてしまい、クライアントとのコミュニケーションが十分に取れなかった。	実習施設の パンフレット 授産施設の内容(教科書程度)	作業中のクライアントとの会話から病気の体験や薬の副作用について理解を深めている。実習日誌の記録の仕方が出来事のみで記載から、クライアントの観察と自分のかわり考えた記録に変化。	B 実習現場(作業)に慣れるために時間がかかった。	・授産施設での作業が中心 ・保健所 ・作業での品物の配達
事例12 男性 3年	総合病院 (精神科)	12days	実習指導者が業務の合間に声をかけてくれる。実習の一日の振り返りとフィードバックをしてもらい充実した実習体験。デイケアメンバーからやコメディカルスタッフからのフィードバックと平行した指導者からのフィードバック。	クライアントから「ありがとう」といわれることとはどういうことを自分で聞いて「ありがとう」と言われるワーカーになりたいと考える。長期入院となっているクライアントとの会話から援助の課題を探そうとしている。	精神保健福祉法 入院形態 32条 福祉手帳など	実習中に他のスタッフやクライアントから実習指導者の信頼度の高さを理解し、自分も精神保健福祉士として仕事をしたいとモチベーションを高めている。面接は面接室だけではなく、クライアントの生活場面のライフスペースインタビューの重要性を理解している。	A とても良かった。疑問もすべて解決した実習だった。	・院内勉強会の参加(新人研修) ・医療相談室 ・精神科デイケア ・地域の共同作業所の見学
事例13 男性 3年	授産施設	12days	クライアントと一緒に作業をする過程でも実習指導者がかかわってくれている。他のスタッフのフォローも十分だった。実習日誌を通じての詳細なフィードバック。	施設の作業を通じてクライアントと共に過ごしながらコミュニケーションを深めている。クライアントを病者としての視点が強く見受けられた。	授業内で得た知識程度 施設の事前学習も調べない。	巡回指導では実習日誌の記録の不備と事前学習がされていないことを指摘。巡回指導後から実習への取り組みと実習記録の仕方に変化。実習日誌には辞書を使うなど内容にも自分の感想を含めたクライアントとの観察の記録となっている。	C→D 自分のふがいなさを感じた。漢字も書けず、精神保健福祉法も知らなかったことに直面した。	・授産施設での作業が中心 ・授産施設周辺の社会資源の見学

の変化、④現場実習に対する学生の自己評価（A：高い～D：低い）の4段階評価）

インタビューを行った学生に対しては、①インタビューの目的、②結果の処理については学生のプライバシーに配慮すること、③聴取した内容と成績評価とは一切関係がないこと、を事前に説明し本人の了解を得た上で実施した。

また、インタビューにおいては、学生が体験した実習日誌では表現しきれない肯定的、否定的な感情を言語化してもらい、本研究テーマである学生の実習体験に着目し、分析した結果を（表）にまとめた。

（2）結果

①実習指導者との関わり

1) 理想と現実のギャップの体験

事例4,事例7,事例8は、実習体験により、現実と理想との違いに衝撃を受けるリアリティショックにつながっている。教科書上で学習して得た精神保健福祉に関する知識と現場の違い、初めて出会う精神障害者の疾病と障害について、その生活状況と精神科病棟での処遇などである。もちろんこれらには自分なりにイメージした精神保健福祉士の姿も含まれるであろう。しかし、このリアリティショックの体験は、実習指導者の適切なフィードバックにより軌道修正され、実習が継続されているのである。

2) 実習日誌や口頭によるフィードバック

主として事例7,事例8,事例12において、実習指導者との関係による実習体験が重要となっている。これらの共通点として、実習指導者が時間ある限り実習生とかかわり、実習生に質問しその答えを導き出しフィードバックしているのである。また、実習日誌において実習生に返されるポジティブなコメントは、実習体験を充実させると同時にモチベーションを高める効果となっているのである。

3) 不安の体験

事例10のように、自習時間が多くあった学生は不安を体験している。これは実習の方向を見失った結果によると判断される。実習プログラムは作成されているが、実習生にとって「今日は何をするのか」が見えなくなると、ただ与えられたテーマをまとめているだけに過ぎないものになる。

②利用者との関わり

1) 「かかわれなさ」の体験

事例1のように初めての現場実習という過度の緊張に加え、事例2でも精神障害者といわれる人々へ関わることが初めての体験であり、どのように接して良いのかその方法がわからないことから、クライアントへの「かかわれなさ」が発生していると考えられる。

また、事例7においては、実習生自身が発する言葉によってクライアントの症状が悪くなるのではないかという不安からもかかわれなさが発生しているのである。

2) 「かかわらなさ」の体験

学生の現場実習に対し積極的なモチベーションがない場合に発生するものであるが、事例9のように、事前学習もせずいわゆる「こなす実習」として臨んでいるが、精神科デイケアでの実習と受け持ち患者との関係からかかわらざるを得ない状況となり、クライアントとかかわることの体験から実習に対するモチベーションも変化しているのである。

3) 利用者に受け入れられた体験

事例3,事例10,事例11,事例12,事例13では、利用者とのコミュニケーションから関係性を深め、利用者が抱える問題を学んでいる。また、授産施設では作業を一緒に行う過程やコミュニケーションから、利用者に受け入れられた体験をしている。受け入れられた体験は、援助者としての視点と利用者へ積極的にかかわる姿勢を育てているのである。

③教員から見た学生の変化

1) モデリング (模倣)

事例6の特徴に、実習指導者から得るモデリング (模倣) がみられている。これは、実習指導者がクライアントへかかわる姿を見て学習したものであり、実習生が実習指導者と同じような視線の取り方や声のトーンなど真似ていくものである。実習生が車イスのクライアントに話かける際、自分の視線を下げクライアントと同じ目線で会話をする姿が見られた。これは、実習指導者の特徴的なスタンスであることから、実習生の変化として捉えたものである。

2) こなす実習

事例9においては、「こなす実習」がその中心となっている。表面的なレベルでの実習体験であり、モチベーションの変化は後半になってやや高まった程度であり、実習体験が深まらず自己覚知に結びついていないのである。つまり、学生本人の取り組む姿勢と実習の時期も含めてその問題が浮かび上がっている。事例13においても「こなす実習」であったが自分の問題に直面化して変化が生じている。(次項のモチベーションの変化で記述)

④学生の自己評価 (A：高い～D：低いの4段階評価)

1) モチベーションの変化

事例3の特徴として、自己評価がBであるが「自分なりに意欲的に取り組めた」というコメントから今後の学習に取り組む姿勢に結びついているのである。また、事例13においては、自己評価をC～Dとしている。事前学習もせず何とかなると思いながら行った実習であったが「自分のふがいなさを感じた」とし、実習終了までに実習日誌や態度に変化が現れ積極的に取り組むモチベーションに変化しているのである。

2) 勉強不足の体験

13事例中の6事例（事例2,事例4,事例5,事例8,事例10,事例13）が勉強不足や自分の事前学習の不備を指摘している。実習中に現場で語られる専門用語を理解していなかったり、実習指導者からの質問に答えられない場面や利用者との会話の中からそのことを感じている。例えば、援助に必要な社会資源で使われる言葉であることは理解できても、実際にどのように使われ動いているのかがわからなかったとしている。

3) 楽しかった体験

事例7、事例8、事例9、事例12においては、現場実習が「楽しかった」「満足している」と回答している。この背景には実習指導者との良好な関係が影響を及ぼしていると思われる。学生が「楽しかった」と表現していることに、「実習による消化不良」が改善されていることが挙げられる。実習中の疑問や問題点などが整理されることにより、自分の実習に取り組む姿勢や今後の学習などについて積極性が引き出されている。

(3) 考察

現場実習の教育的効果について、13事例の学生のインタビュー結果をまとめてみると、次のようなことが示唆された。

- ①学生の実習態度を変化させる最も重要な要因に、実習指導者からのフィードバックが挙げられる。フィードバックを元に、実習生自身が直面した自分の課題を掘り下げることにより、実習体験が効果的なものになっている。
- ②実習指導者は勿論のこと、クライアントやコ・メディカルスタッフの姿を通して刺激や影響を受けながら、実習体験が深まっている。クライアントとのコミュニケーションにおいて、受入れられたという体験が、実習に対するモチベーションを高め、学生に変化をもたらしている。
- ③現場実習の体験が、学生の職業観にも大きな影響を与えていて、「この仕事をしてみたい」という具体的なイメージが、職業的なアイデンティティの形成に結びついている。

実習現場において、学生は大学での講義だけでは得られないさまざまな影響を受けながら、成長している様子が窺われる。特に、実習体験を深めて効果的にするものに、現場の実習指導者の役割が大きく左右し重要であることが改めて確認された。実習生は実習指導者からの適切なフィードバックによって実習での不安を解消しながら、精神保健福祉士の仕事の理解を深めているのである。

また、大学の指導教員側の課題として、実習指導者との連携を図りながら、学生の実習体験をより深めて効果的にするための実習教育システムの開発と、援助者としての視点を強化するための指導方法について検討していくことが、重要であることも確認された。

6 まとめ

精神保健福祉士は、「人」を直接の対象としているのである。その専門的な援助への知識と技術は人と人に対するかかわりの体験的基盤の上で強化され、そして補完されているのである。その大きな第一歩に精神保健福祉援助実習があると考え。そのため援助に関する知識や技術を体験的に学ぶための「実習教育」が重要となるのである。つまり、実習体験という体験学習 (learning by doing) が不可欠とされるのである。実習体験の持つ意味は、クライアントや実習指導者との関係を通して援助の視点を見だし、そして考え、さらにはソーシャルワーカーに必要な自己覚知について知る大きなきっかけとなることも含んでいるのである。

実習体験を効果的にするためには、実習を行う現場によって違いはあるが、実習指導者からのフィードバックが大きく左右することが今回の事例調査で確認ができた。学生が現場実習によって得た実習体験を事後教育の中で生かすことこそ、精神保健福祉士としての職業的アイデンティティの形成に働きかけるものだと考えるのである。

今後の課題として、養成を行う大学側と指定施設である実習の現場（施設および実習指導者等）との連携はどうあるべきかを踏まえて、学生にとって現場実習と実習教育がさらに有効とするために、現場が問うものと現場に問うもの（受ける側の諸問題）大学が教えるものと大学に求めるもの（送り出す側の諸問題）をテーマとして、さらに検証を重ねていくこととしたい。

参考文献

- 1) 坂野憲司・長坂和則・高安隆・白須誠「精神保健福祉援助実習についての考察Ⅱ」日本福祉教育専門学校紀要 第10巻第1号 2003年
- 2) 西原雄次郎「大学における社会福祉教育と当事者問題の教授法」『ソーシャルワーク研究』vol.25 No.4 相川書房 2000年
- 3) 健康科学大学福祉心理学科「学外実習の手引き 2005年度版」
- 4) 坂野憲司・長坂和則「精神保健福祉援助実習についての考察Ⅰ」日本福祉教育専門学校紀要 第9巻第1号 2001年
- 5) 福山和女・米本秀仁「社会福祉援助技術現場実習指導・現場実習」ミネルヴァ書房 2004年
- 6) 改訂第3版精神保健福祉士養成セミナー 第8巻「精神保健福祉援助実習」へるす出版 2005年
- 7) 福山和女他「保健医療ソーシャルワーク実習」川島書店2004年
- 8) 藏野ともみ・長坂和則・濱端賢次「精神保健福祉士養成における初期段階の実習教育の現状と課題」大妻女子大学人間関係学部紀要 第5号 2004年
- 9) 長坂和則「精神保健福祉援助実習における専門教育の課題に関する一考察」教育学研究（明星大学通信制大学院研究紀要）vol.5 2005年
- 10) 福山和女・米本秀仁「社会福祉援助技術現場指導・現場実習」ミネルヴァ書房 2004年